うるくの歴史と文化を語る会

会報 ガジャンビラ

第７号

発　行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：當間一郎　編集人：赤嶺和雄
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
TEL.(098)857-1175　FAX.(098)852-1486

金城清議氏を語る

うるくの歴史と文化を語る会代表　當　間　一　郎

金城清議氏は、字大嶺出身で、早くから「字大嶺の歴史と文化」に関心を持って、地道に調査・研究を続けておられる。

金城家（西瀬底一屋号）は、金城次郎氏、金城亀氏、金城亀栄氏と続く大嶺村の網元で、清議氏は４代目にあたる。歴代網元の家だったので、常時14、５名の漁師がつめていた。そのため海や漁に関する話が多く、子供の頃から耳学問が多かったという。

清議氏が大嶺村の歴史的・地理的環境に強く引かれたのは、金城家二代（金城亀）からの影響が大きいという。良き生活環境が文化財を創り出すエネルギーになっている。

三代とも舟大工として、村の繁栄にかかわり、清議氏も大工業を継ぎ、技とこころを修得しておられる。

清議氏は、昭和58年１月31日発行の『大嶺の今昔』の編集委員として、先輩方とともに字大嶺の歴史、行政、生活習慣等をまとめている。この１冊は、今日、さかんに行われている字誌編集のさきがけである。清議氏等は、現在、第２集の編集事業を進めている。

清議氏は、平成11年６月に『大嶺村と那覇飛行場の模型』を製作している。模型は、昭和15、6年頃の大嶺村の様子を再現しており、貴重な集落景観資料である。平成12年に大嶺東の旗頭「青龍」（旗字は龍飛鳳舞）を製作し、13年には西の旗頭「白虎」（旗字は順風）を製作している。

平成17年３月には、戦後２代目の獅子頭をはじめ、胴体部分等を製作した。３月21日の獅子像への入魂式と祝賀会で向上会から感謝状が送られた。著書に『“湯ったり”ふたり旅』（平成15年６月発行）がある。

うるくの歴史と文化を語る会総会での記念講演　戦前の大嶺集落模型を説明する金城清議氏

字大嶺特集

字大嶺を語る

金城清議

大嶺村づくり

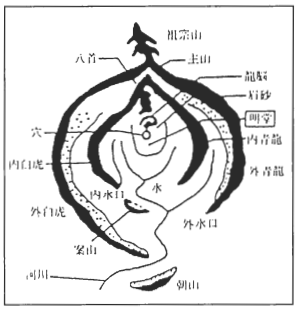
金城清議・奥さん『“湯ったり”ふたり旅』

大嶺の村づくりの基盤は中国の風水思想が多く取り入れられている。集落の形成は前後に標高二十八メートルの大嶺山があって、そこを人々は「タマグシク」「ウフグシク」と呼び霊域として深く信仰している。（いわゆるウタキ信仰である）全面は大きく開けたイノーで幾世紀に渡り神々が作り出した自然の三つの小島。南、北のユニ小が点在し遠くに慶良間諸島の山々が紫に染まりエメラルドの海、波の花が咲く眺め、先人達はこの地に中国から伝わった風水思想による村造りをし、永遠の理想郷にと志したであろう。

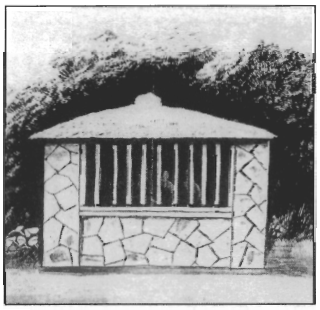
風水思想には四隅の神様がいます。四隅というのは四つの方位の神様で青竜・朱雀・白虎・玄武の神々である。青龍は勾芒といい方位でいうと東の神様、水の神で季節は春、色は緑。朱雀は祝融といい方位でいうと南の神様、火の神で季節は夏、色は赤。白虎は方位でいうと西の神様、季節は秋、色は白で道徳を示す。玄武は北の神様で季節は冬、色は黒で亀を指し長寿を表すとある。

風水によると、集落の東には清流がなければならないとある。大嶺山のウフグシクは岩山であり、その岩山から清流が湧き出している。樋川（ヒィジャー）を東の青竜とした。大嶺の本家筋（ムートヤー）の多くがこの泉の西の方位に点在する。旗頭も風水の思想にのって青竜となぎなたとし、東のシンボルの旗頭にした。風水思想によると伽藍の造営には「四神相応の地を選べ」とある。北に山を背（クサテ）にして南の一段と上がった所に造営するのがよいとされている。大嶺の「ビズル」「テラヤー」古波鮫（コーザマ）の「火の神」土帝君が南の朱雀にあたる。西の白虎は道徳の神様である。虎は千里行って千里帰るということわざがある。安全の神様でもあるので西の漁民は安全操業願いで親子の白虎を描いた旗を造り西のシンボルの旗頭にしたと思う。北の玄武は長寿の神様で亀を指し、北の大嶺岬には竜宮神が祭られ旧正には長寿と豊漁を祈願し漁民から提供された魚や農家からは大根で村人達が仕事初め（ハチウクシー）で豊漁と長寿を祈願した。

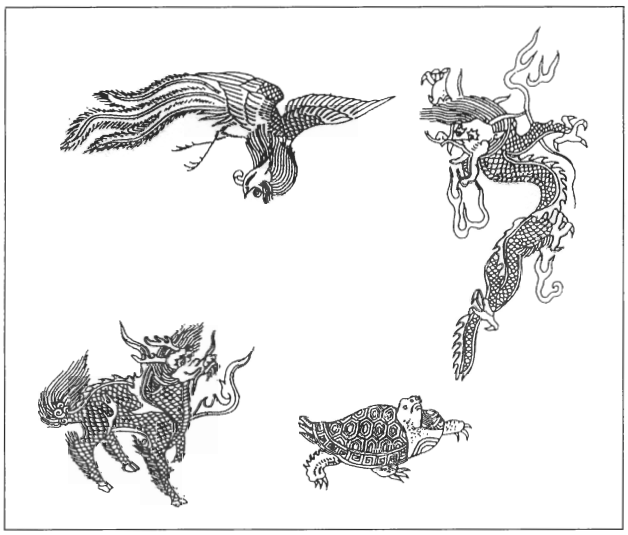
先人達は道造りにも配慮したと思われる。四神の方位を避けて碁盤目のような井然した型になっている。住宅の建築にも風水思想が行き届き水糸を張って羅針盤を置き四神の神々にふれないように家を建築して家庭の安泰と福禄寿を願っただろう。又集落には風水思想による火返し（ヒーゲーシ）と云われる六ヶ所の池（クムイ）があります。東には古波鮫の池、中央部に後ヌ玉井の池、南にサトウモーヤーの池、土帝君の池、西に西の池があります。これらの池も昭和の時代になり青年会の活動資金としてコイやフナの養殖池として運用された。その為、池は青年会で清掃されきれいになり収入も増えたそうです。コイやフナは熱冷ましとして重宝されていた。戻ることの出来ない「ふるさと」と想いながらも模型作りの中で改めて先人達の知恵を垣間みた想いである。



理想的風水の図


トーテーク（土帝君）

魚売りに出る前のひととき　昭和７年頃


陰陽五行の四霊図。右上から時計回りに青龍（東）・玄武（北）・麒麟（西）・朱雀（南）を顕し、後に白虎が麒麟に変わって西を顕すようになる。

小禄地区市民大運動会　自治会の旗頭の演舞

昭和16年頃の大嶺と那覇飛行場

大嶺の位置と字の行政組織

大嶺の集落は沖縄本島の西に位置し、現在の那覇空港ターミナルビルから西の方向にありました。

集落は大嶺山上ヌ毛（イーモヌー）を背に南西を向けて拡がっていた。南（ヘエー）の拝所（ビズル）前から北（ニシ）の大嶺岬慶伊瀬の浜（チィシヌ浜）まで約９００ｍに十組の近所（チンジュ）と北に長山（ニシヌチンジュ）二十八世帯合わせて約三百五十世帯の住人が半農半漁の生活をしていた。

（大嶺の今昔より）字の行政組織

有志……字の議決機関のメンバー。有志は村会議員、区長の経験者、村役場勤務者（役場吏員）、字担任の教員。評議会は有志会で推薦。

区長……任期２～４年。字の行政の責任者。字の有志・評議会で推薦。

頭（カシラ）……任期１年。字の会計。字の有志評議員で推薦。

役目（ヤクミ）……任期１年。区長、頭を助け、字の毎月の行事治安の確保に努めた。南組（ヘーグマ）、西組（イリグマ）から二人づつ選出。

二才頭（ニーセーガシラ）……任期１年。区長、頭を助け、字の毎月の行事治安の確保に努めた。南組（ヘーグマ）、西組（イリグマ）から二人づつ選出。

村役（ムラヤク）（給仕）…任期１年。区長、頭を助け、伝達事項を伝言する任務。字の有志、評議員で推薦。

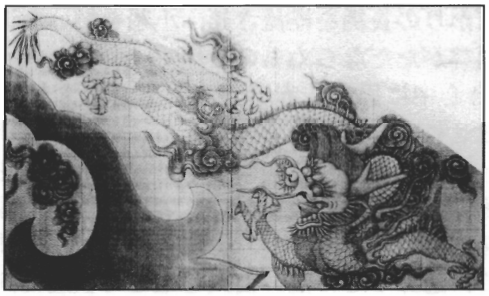
近所頭（チンジュガシラ）……任期１年。字は11の近所（チンジュ）に分かれていたのでそれぞれ近所をおさめる頭。各近所で選出。

近所サジ……任期１年。近所頭を助けた。近所での連絡の任務。

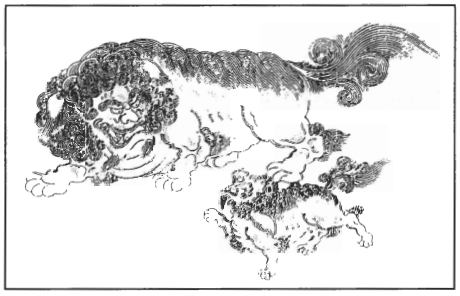
実行員……任期１年。近所頭と同様な任務をもっていた。

（近所頭が輪番瀬制みたいになり、指導制に欠けて惰性的になっていたので、行政強化のため実行員制度がとられた。）

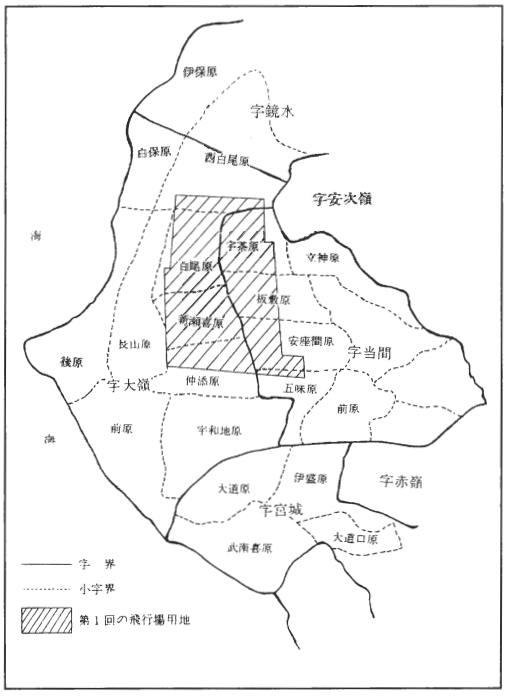
現在の旗頭「順風」



「首里城の龍」龍は水の神、自然神の一つとして神聖視され、風水では水を顕す象徴となった。



「大小獅子図」獅子は君主の権威を顕し自然の力の象徴として風水にも用いられた。



大嶺の原名と第１回の飛行場用地

大瀬、ザン池、大泊、大嶺岬、那覇空港の航空写真

大嶺の漁夫（ウミンチュー）

一部　大嶺の今昔より

大嶺は古くから半農半漁で生計を立ててきたがその中でも漁業の占める比重は大きかった。これは海で働く漁業の方がすぐに現金が手に入り、（那覇の市場が近い）生活の設計が容易にできたからであった。又大洋に挑む男性のたくましい姿が若者の血潮をかき立たせ海への魅力を感じさせた為でもあった。

主な漁法は、廻し網漁・サシ網漁・追込漁で２、３隻の舟が一団になって漁を行うのが普通であった。慶伊瀬（チィビシ）の神山島に三ヵ所、ナガンヌ島に一ヵ所、網元、それぞれの小屋があった。鰯（ミジュン）の時期になると漁夫は小屋で泊まり込んで漁をした。一隻が那覇まで運び仲買人に渡し帰りは食料品を積んで島に通ったそうです。又、渡嘉敷島ではカツオの餌スルル小を大嶺漁夫が供給していた。慶良間諸島、慶伊瀬諸島、大嶺の広大なイノー那覇港入口等々、大嶺の漁夫の漁場は日々かわった。潮の流れ、波、風、慶良間流（ルー）を熟知していたからであろう。

○大嶺掟金城等の外国船救助（島尻郡誌）

尚育央12年５月（皇紀2506年）（1846）１隻の仏欄西船が小禄村字大嶺の洋上で暗礁に擱挫して、まさに沈没しようとしていた。時に大嶺掟金城は、その難船の有様を目撃して、即時に同字の百姓等を呼び集め、更にその字所有の小船や諸方からきている小舟等を集めた。同字に赤嶺筑登之、上原筑登之の両人があった。もともと海水には熟練していたので、両人は相携えて小舟に乗り、集まってきた十余隻を率いて仏船の前に漕ぎつけた。仏人は彼等の小舟が来るのを目撃して、三四十間ばかりの長縄を浮流させ、小船を招いたので、彼等は仏船へ乗り込んだ。言語はさっぱり通じないが、彼等仏人の顔容がただならぬものを見て、危難を救ってくれと、いう請いと察した。金城は必ず船体に損所があるのであろうと心中に思い、赤嶺と上原を潜水させて探査せしめたが、損じた箇所がなかった。そこで艦から錨を投じて繋留させねば安全を期する事はできないと告げた。そこで仏人達は赤嶺、上原の両人と共に協力して、その鉄縄をボート２隻に乗せて海中に投下してその危機を救った。ちょうどその時、風波が巻き起こって２隻のボートは転覆し、正の万死一生の境に浮いていた。金城等はボートを出して、必死の力を注いで救出した。その中仏人一人は遂に姿を見失ってしまった。金城等は風波が静まった後で上陸し、その事情逐一役人に報告した。王府は早速小舟を出して、通弁やその他の役人を乗せて仏船に向かった。その案内者は金城であった。船が着くと仏人等は大変喜んで、金城等に手足の形容で感謝の表情を見せた。翌朝は風波全くない凪いで仏船も無事に離礁した。仏船の頭目等は金城から受けた恩を総理官に向かって厚く謝礼した。政府は金城が外国船到来し、騒擾の間によくその危険を救済したる功労を嘉して筑登之座敷の位にのぼらせ、中布二反を贈与し、彼の赤嶺、上原へはそれぞれ小黄冠を贈ってその功を賞したとの事である。（球陽　尚育王13年（1848））

サバニから荷車で漁を運ぶ人たち　昭和７年頃

大漁のサバニを囲む人たち　昭和７年頃

銭洗い（ヂンサラシカー）

集落の清流（樋川）ヒージャーから約100メートル程南に離れた屋号「南又前」の山手に水が岩間から湧出る井泉（ヂンサラシカー）がある。井泉の直径が約1.2メートルの大きさであった。水位は柄杓で汲みあげる程で洗場には石に洗面器程のくぼみがほられていたと近くに住んでいた赤嶺サダ子さんは語った。昔の大嶺の漁夫は外国船や唐船の航海に乗船して風や潮流をよみながら慶良間流（ルー）や那覇港入口の難所を克服して無事に出入港できる様水先案内をしていたと考えられる。又、外国船からは報酬として貨幣が渡されその金をヂンサラシカーの石のくぼみで洗い清めたでしょうか。旧３月３日の日には女衆がこの井戸に詣でて家庭安泰を祈っていた。

大嶺の海人とジュゴン

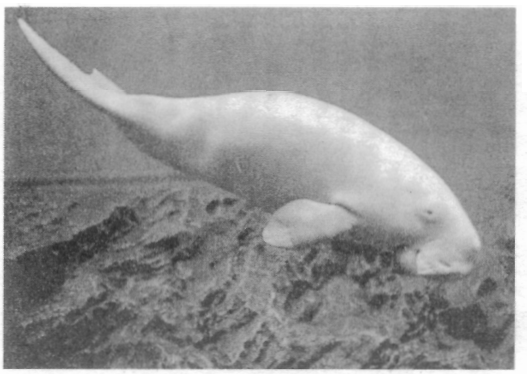
大嶺岬慶伊瀬の浜（チイシヌ浜）から北西約300mの方向に中ノ瀬（ナカンシ）という砂浜があり、その西にザン池（ザンクモイ）北に（クジランシ）東に大泊（ウフドマイ）という入江があります。

大嶺集落の前ヌ浜の中央部と岬の慶伊瀬の浜、大泊、ザン池の南側の海底は砂であり、大嶺の漁民が瀬草と呼ぶ海藻（アマモ）が繁茂していた。小生の生まれ育った大嶺では、ジュゴンをザンと呼んでいた。

小生の祖父は船大工で何時も舟屋（フニヤー）でサバニを造っていたが、３時休みの時は縁側に腰をおろし、黒砂糖とお茶を楽しみながら体験談と昔からの伝え話をしてくれました。ある日、祖父の友人の漁夫がたこ漁に出たがしばらく漁をしていると、ザンの子供が漁夫の身体にまとわりついてきた。浅瀬までついて来たので、抱きかかえたが、逃げようともしない。漁夫はいつまでもザンの子供と遊ぶわけにもいかず、別の漁場に場所がえをして漁をしたとの話です。又、昔ジュゴン（ザン）が搾餌するため浅瀬に入り瀬草を餌食していたが引き潮の時には潮だまりに取り残され出られなかったという。その様なことから、この潮だまりの地名をザン池（ザンクムイ）と呼ぶようになったそうです。そのあとザン池では人力で削られた巾１m、長さ約８mの堀割りが出来たが、きっとジュゴン（ザン）が外海に出られるようにと漁民が岩を割り、協力して長い月日をかけて完成した堀割りだと祖父は話していた。いつの時代の事かは祖父もしらなかった。

ちなみに、大嶺ではかぜをこじらし、ぜんそく気味になるとザンの声、又はザンの咳だと言われていた。夜になると海に接していた我が集落の家々から、サンシンから奏でる曲と哀愁をおびた島歌が聴かれ、砂浜では若い男女のかたり合い、満潮時にはジュゴン（ザン）の息づかいが聞こえるのどかな集落であったと思う。

大漁を迎える子供たち。後方は瀬長島。　昭和７年頃



ジュゴン　ジュゴン科に属し、海で生活する草食性の哺乳類。体型は放紡垂状で、全長２m。青灰色。雌が子を抱く姿から人魚を想像したという。天然記念物。奄美大島からアフリカ東部に分布。

大嶺岬に来ていた珍獣

小生は那覇市（現那覇飛行場の地先）で生まれ育った。

昭和19年迄半農半漁の豊かな暮らしぶりであった。昔の大嶺にはザザーン人数という漁法があったそうです。その漁法とは入江に網を張り、十数隻のサバニで沖にいる魚群を竿や石などで脅しながら入江の方に追い込み、網で取る一種の追込漁である。大嶺の今昔によると1871年の春、マット（入江の名称）の近くにいた漁夫が漁の大群を発見し、ただちに漁が始められ、ザザーン人数の漁法でマットに漁を追込み、大漁であった。その網の中の獲物を見て漁夫は今まで見たこともない、頭が犬に似た動物が入っているのに大騒ぎとなった。村中、他所村からも見物人が集まったという。その後、この珍しい動物を大嶺の漁夫が捕まえたとの噂が首里の役人の耳にまで広がり、そのため首里から使いの人が来て事の顛末を聞かれたが、その時すでに珍獣は食べられていて、しかたなくその珍獣の骨を持って行き事情を報告したそうです。

ちなみに当時、試食の順番は年配者の順であったという。これは年配者をうやまってのこと・・・？

消えた小島の想い出

大嶺集落（現那覇飛行場西側）の前の浜と呼んでいた所からわずか150m程の海上に西の与根小、少し離れて南の与根小、砂与根小という３つの小島がありましたが、今ではその影も形もありません。

干潮時には大人の膝位の深さで、歩いて渡れた。小島は白浜まで軍配昼顔（紫の花が咲く）が群生して風に吹かれて美しかったと今でも思い出される。又、モンパの木には白い花が咲き、その枝ぶりや低木のトベラの木等々が小島を包み込んでいた。

西の与根小の中央部は畠で出入口を風除けのためか１m巾位の通路がトベラの低木で囲んであり、約350坪程が手入れの行き届いた畠としてあったのを覚えている。

南の与根小には畠はなく、モンパの木とトベラの木が約2,500坪位群生していた。

砂与根小は植物がなく、約1,000坪位で、その名の通り砂山であった。

三つの小島は自然の恵みをいっぱい受け、遠く慶良間諸島を望んで風光明媚な南海の島々でした。

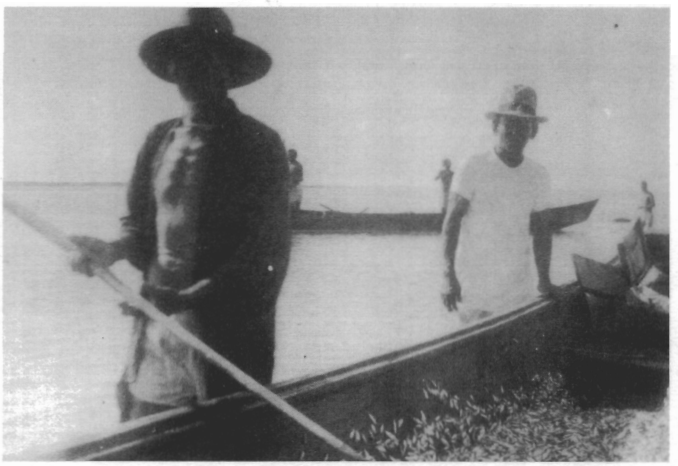
西の与根小で実際畠をしていたという関係者が今でも健在である。その方の話しでは、祖父が日露戦争の功績を認められ一等兵で勲八等功七級の金紫勲章を受けられた勇士であったそうで、当時の村長に小島を開墾して畠にしたいと申し込んで何でもただと言うわけにもいかず、とうとう１円で買ったと聞かされたそうだ。

そして毎日島の中央部の木を倒し、土を掘り木の根を除き、砂浜に打ち上げられた海藻を集めては堆肥づくりをし、潮の干満に合わせて夜遅くまで働き通しの開墾だったという。数々の作物の中でも特にスイカは砂地のため、甘くて出来が良かったと今でも大嶺の先輩たちの語り草である。

この様な島も昭和時代になり大嶺平野ではじめて飛行場が出来、どんどん飛行場が拡張されていった。工事は始まり、干潟からの砂利及び砂が運ばれ始めた。そして昭和18年には大嶺の西側150世帯の民家が強制接収され、これら３つの小島もだんだん小さくなっていった。この様子を見つつ、この小島を開墾した人も島の行く末を案じてこの年の暮れ病に倒れ、昭和19年５月遂に帰らぬ人となった。戦争は勝つも負けるも悲惨な事だと彼は想っていただろう。日露戦争での武勇を語ることは決してなかったという。

第二次世界大戦の後、小島は米軍の基地建設の為、完全に砂利は取り尽くされ、今では地図からも消えてしまった。

大漁を見つめるカンプーのオバー　昭和７年頃



大漁のスク　昭和７年頃

大嶺岬に残っている戦前の石積みの護岸

コンクリートの新しい護岸と竜宮神